

郷土の

本棚

大槌発 未来へのランドデザイン

谷口 真人編

東日本大震災で大きく被災した大槌町における、地域資源を生かした

復興のランド・デザイン（全体構想）について

研究者らが寄稿した。同

町の自然と文化に深く関わる「湧水」を中心に据え、地域の宝を生かした



言提興かす水生湧

まちづくりについて提言している。

本書は2部構成。第1部「湧水と生きものたち」では、5章を通じて湧水のメカニズムや生態系などについて論じる。

まざまな利害関係者が「湧水」をめくり合意形成することで、未来の大槌の姿が議論できるとする。

岐阜経済大の森誠一教授は、震災前から大槌で生態調査を行ってきた魚「イトヨ」について論じる。震災前後で数が激減したものの、湧水や環境保全活動などの理由で生き残っていることを説明。一方、拙速な復興事業が行われれば、津波による被災以上に生態系に

悪影響を及ぼす可能性を指摘している。

このほか、井戸の調査や大槌の水のつながり、大槌湾の環境などについて論じている。

る。郷土芸能は地域の精神的なよりどころとして存在し、だからこそまざまな支援の動きがあったと説明。郷土芸能は地域社会の柱であり、再建に欠かせないローカル・コモンズ（共有資源）であることなどを解説する。

エピソードで編者は、多くのものにつながる物事を問題解決の中心に据える大切さを説く。湧水が地理的にも問題解決のテーマとしても多くのつながりをもつことを、同書は主張している。

1章は編者の谷口真人さん（総合地球環境学研究所副所長）による大槌の湧水についての総論。湧水は生業としての水産業と社会をつなぎ、人のつながりを通してシンボルとして存在する可能性が高いことを指摘。さ

よる被災以上に生態系に

追手門学院大（大阪府）の橋本裕之教授は、大槌町の郷土芸能と震災後への支援について述べ

（昭和堂・2700円）